

令和元年8月27日現在

機関番号：25502

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04167

研究課題名（和文）早期支援サービスの質の向上を目指した障害児支援者コンピテンシーモデルの開発

研究課題名（英文）Development of a competency model for supporters of disabled children with the aim to improve the quality of early support services

研究代表者

藤田 久美 (Fujita, Kumi)

山口県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：40364129

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では幼児期の障害児福祉サービスに携わる支援者の専門性の確立を目指すことを目的にコンピテンシーモデルの開発を行った。児童発達支援に携わる職員に必要な能力・資質を質的分析で整理した上でコンピテンシーアセスメント項目（5領域、142項目）を作成した。支援者（回答者611名）の自己評価を、共分散分析によって職位および経験年数とコンピテンシーの獲得度との関連性を検討した。その結果「知識」「技術」の2領域において職位の高低とコンピテンシー獲得度との間に有意な線形関係が認められた。幼児期の障害児支援者のコンピテンシーモデルとして、初期キャリア3年以内の支援者と3年以上の支援者の2つのモデルを提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コンピテンシーは、専門分野においての知識・技能、資質・能力等、具体的な指標が示されるため、専門性について明確に示すことができる。様々な職業分野で開発されてきているものの、障害児福祉分野における開発はなかったことから本研究の成果は学術的意義があると考えられる。

また、開発したモデルとコンピテンシーアセスメントシートは障害児福祉分野の支援者養成に活用できるツールとして期待できる。我が国において、早期支援を担う児童発達支援センター等に従事する支援者の専門性の向上は緊急の課題として掲げられていることから、本研究の社会的意義はあると考えられる。今後も我が国の障害児福祉の発展のために研究を継続・発展したい。

研究成果の概要（英文）：In this study, we developed a competency model with the aim to establish the expertise of the supporters involved in the welfare services for disabled infants. We created competency assessment items (5 areas, 142 items) after identifying the abilities and qualities necessary for the staff involved in child development support through a qualitative analysis. We examined the relationship between the job positions and the years of experience and the degree of acquired competency through a covariance analysis of the self-assessment of the supporters (611 respondents). The result found a significant linear relationship between the levels of the job status and the degrees of acquired competency in the two areas, "knowledge" and "skills." A model of 2, a supporter within the early stage carrier for 3 years and a supporter in more than 3 was proposed as a competency model.

研究分野：障害児福祉

キーワード：障害児福祉サービス 障害児の早期支援 コンピテンシーモデル コンピテンシーアセスメント項目  
児童発達支援 障害児支援者の専門性

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

子育て支援システムに含まれる障害児支援の場として児童発達支援センターの役割が明確になっているが支援者の専門性の確立が不十分であることも指摘されている(平野・納富 2010、藤田 2014)。専門性を明確にするためにコンピテンシーは有効であると捉えられ、専門分野においての知識・技能、資質・能力、行動や特性等、具体的な指標が示されるため、専門性について明確に示すことができる。保育分野においても開発され、養成教育や支援者養成に活用できる可能性も示されている(高山 2009)。我が国の障害児福祉分野において、福祉サービスの質向上や支援者の専門性の明確化が課題として挙げられ、厚生労働省でガイドラインの作成等の行う準備がされていた。申請者のこれまでの研究成果からも、幼児期の児童発達支援センターに従事する支援者の専門性の確立を行う必要性を明らかにしており、国内外の研究のレビューからコンピテンシーモデルの開発が有効であると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、幼児期の障害児福祉サービスとして実施している児童発達支援センターに従事する職員の専門性の確立のためのコンピテンシーモデルの開発とコンピテンシーアセスメント項目の作成及び検討を行うことを目的とした。

コンピテンシーモデルの開発は、幼児期の障害児支援に携わる支援者のキャリア形成やキャリアを形成するための専門家養成、人材養成に導入するツールを作成する研究につなげることを前提に研究をすすめることとした。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究 : 質的研究による検討-児童発達支援の支援者の姿からの探求

フォーカスグループディスカッションを援用したグループワーク方式と参与観察の質的研究を選択した。保育学研究、社会福祉学、看護学等、対人援助を専門とする学問のコンピテンシー研究のレビュー、保育学研究における障害児保育の理念、方法論を取り入れ、コンピテンシー項目の検討や概念作成を試みる。幼児期の障害児通所支援サービスを実施している児童発達支援センター職員へのフォーカスグループインタビュー及び参与観察を行った。

#### (2) 研究 : コンピテンシーモデル試案とコンピテンシーの分類・概念・項目の作成

幼児期の障害児支援者の声と姿から、支援者の能力・資質、行動、特性等の分析を行い、コンピテンシー項目の検討や概念作成を試みた。

#### (3) 研究 : 児童発達支援に携わる支援者の自己評価をもとにしたコンピテンシーの検討

幼児期の障害児支援に携わる支援者のコンピテンシーモデルの開発に向けた研究として作成したコンピテンシーアセスメント項目(5領域 142項目)を児童発達支援に携わる支援者への調査をもとにコンピテンシーモデルの開発とコンピテンシー項目の検討を試みた。調査結果をもとにコンピテンシーアセスメントの各項目(5領域 142項目)の評価をもとに信頼性を検討する。方法としては、作成したコンピテンシーアセスメントの領域別にクロンバック係数を求めた。さらに、職位および経験年数と各領域のコンピテンシーの獲得度(第一主成分得点)との関連性を検討するために、年齢と性を調整した共分散分析を用いた。

#### (4) 研究 : 障害児支援者のコンピテンシーモデルの開発

研究の総括として、児童発達支援に従事する支援者のコンピテンシーモデルの試案をもとに再検討を行った。児童発達支援に携わる支援者のコンピテンシーについて職位や経験年数との関連をもとに、キャリアに即したコンピテンシーモデルの開発を提案し、幼児期の障害児支援に携わる支援者のキャリア形成やキャリアを形成するための専門家養成、人材養成に導入するツールを作成する研究につなげるための研究課題を明確化した。

### 4. 研究成果

#### (1) 質的研究によるコンピテンシーモデルの試案とコンピテンシー領域・概念・項目の作成

障害児支援者の専門性の確立に向けて幼児期の障害児の発達支援に直接携わる支援者の能力・資質、行動、特性等の分析を行うために、児童発達支援を実施する事業所4カ所に出向き、支援者を対象としたフォーカスグループディスカッションを採用したグループワークを実施し、支援者仲間と実践のふりかえり、言語化、共有する作業の重要性を確認している。参与観察では、障害児支援の現場で繰り返し行われる支援の実際から、障害児支援の現場からの要素を導き出すためにエピソード記述による研究を実施した。質的研究を選択することで、幼児期の障害児支援に直接携わる支援者から障害児支援者が抱える困難さや障害児支援者の描く支援者像及び身に付けたい能力・資質を導き出すことができた。さらに、分析過程において、保育学研究、社会福祉学、看護学等対人援助を専門とする学問のコンピテンシー研究のレビュー、保育学研究における障害

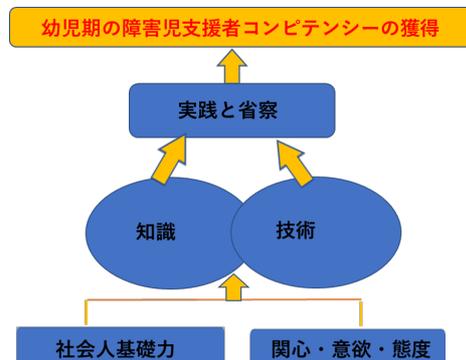


図1: コンピテンシーモデル試案

児保育の理念、方法論を取り入れ、コンピテンシーモデル試案の作成（図1）とコンピテンシー項目（表1）の作成を行った。コンピテンシー領域について「関心・意欲・態度」「社会人基礎力」「知識」「技術」「実践と省察」から成る5領域のコンピテンシーモデルの試案を作成した。さらに、5領域ごとの概念とアセスメント項目を作成した。作成したコンピテンシー項目を児童発達支援管理責任者4名から意見交換・議論を行い、項目や概念を再検討した。

表1；作成したコンピテンシー概念・領域・項目数

領域	概念	項目数
関心意欲態度	障害児の発達支援、家族支援、地域支援に関心や意欲を持ち、支援に臨む態度が備わっている。	24
社会人基礎力	社会人としての基礎的な能力及びコミュニケーション力、ストレス対処能力が備わっている。	33
知識	児童発達支援を利用する幼児期の障害児の発達支援、家族支援、地域支援の知識を持っている。子ども一人一人の障害の特性や発達の状態を理解した上で、発達支援、家族支援、地域支援を行っていくための知識を持っている。	27
技術	児童発達支援を利用する障害のある子ども本人の最善の利益を保障する支援を行う技術を兼ね備えている。障害児の発達支援、家族支援、地域支援を行うためのアセスメントの技術、児童発達支援計画、評価を行う技術を兼ね備えている。家族、障害児の利用する他機関、関係機関と連携できる力を持っている。	36
実践と省察	日々の実践を通して、障害のある子ども一人一人の理解、家族の理解を深める努力をし、よりよい支援を創り出していく実践ができる。記録を書くことやスタッフミーティング及び研修等で自己の実践をふりかえり、ふりかえった内容を実践に生かす努力ができる。	22

## （2）児童発達支援に携わる支援者を対象としたアンケート調査結果

調査対象者は、A地方（8県）の児童発達支援センター、児童発達支援事業に勤務する職員であり、無記名アンケート調査の依頼を行ったところ611名（施設長・副施設長等管理者38名、児童発達支援管理者42名、職員500名、無回答32名）に協力を得ることができた。障害児支援者コンピテンシーアセスメント項目として5領域「関心意欲態度24問、社会人基礎力33問、知識27問、技術36問、実践と省察22問」の142問を構成し、4択（思わない、あまり思わない、まあまあ思う、思う）で回答を求めた。

### コンピテンシー項目の信頼性と支援者の自己評価をもとにしたコンピテンシー獲得度

#### 【分析1】

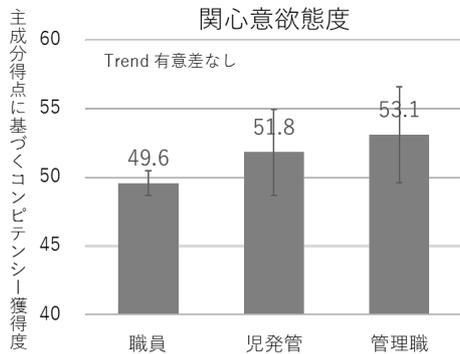
作成したコンピテンシーアセスメント項目について係数を求めたところ、「関心意欲態度（24項目）」は0.932、「社会人基礎力（33項目）」は0.952、「知識（27項目）」0.945「技術（36項目）」は0.969、「実践と省察（22項目）」は0.943と高値が得られ、高い信頼性が確認された。

#### 【分析2】

4択で求めた回答を「思わない、思う」の2カテゴリーに分類して分析を行った。各項目の回答状況は「思わない、思う」の2カテゴリーに分類して示した。信頼性を検討するために、各領域別にクロンバック係数を算出した。また、各領域の総合的評価を行うために、各領域別に主成分分析を行い、尺度の統合を図った。その結果、5領域すべてで、各項目における第一成分の主成分負荷量が0.3を超えており、第一主成分得点は、各領域を反映する総合評価（コンピテンシー獲得度）として利用可能であると判断された。解釈を容易にするために、各領域のコンピテンシー獲得度は50を平均とした偏差値に換算して示すこととした。職位、経験年数とコンピテンシーの獲得との関連をみるために、年齢と性を調整した共分散分析を用い、一次線形trend検定を行った。

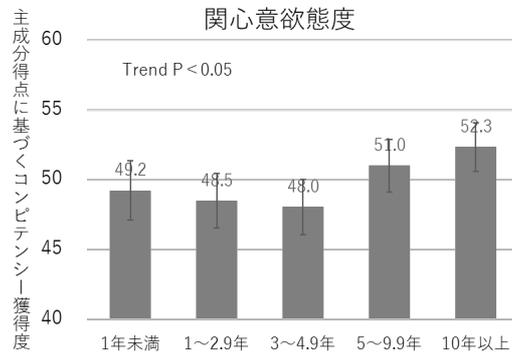
#### <コンピテンシー領域「関心・意欲・態度」>

職位別では、職員、児童発達支援管理責任者、管理者と職位が高い者ほど、高いコンピテンシーを有している傾向にあったが、この線形関係は有意ではなかった。一方、経験年数の長短とコンピテンシー獲得度との間には、有意な線形関係が認められ、経験年数が高い者ほど、高いコンピテンシーを有していた。



グラフは、年齢と性を調整した平均値と95%信頼区間を表す

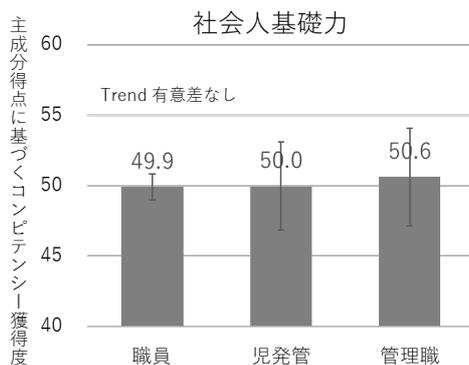
図2. 職位と関心意欲態度との関連



グラフは、年齢と性を調整した平均値と95%信頼区間を表す

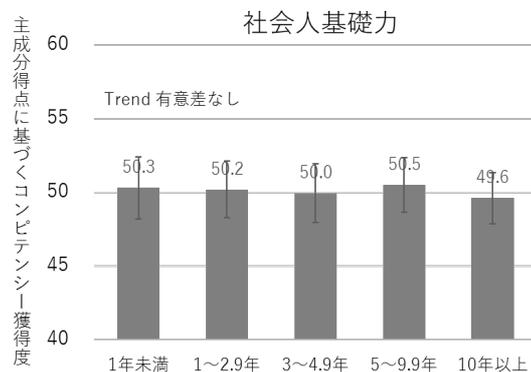
図3. 経験年数と関心意欲態度との関連

**コンピテンシー領域 「社会人基礎力」**  
 職位の高低および経験年数の長短とコンピテンシー獲得度との間に、有意な線形関係は認められなかった。



グラフは、年齢と性を調整した平均値と95%信頼区間を表す

図4. 職位と社会人基礎力との関連

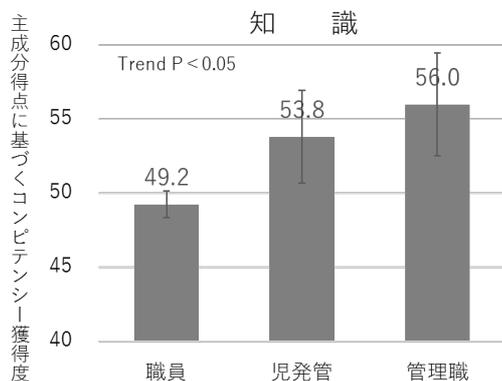


グラフは、年齢と性を調整した平均値と95%信頼区間を表す

図5. 経験年数と社会人基礎力との関連

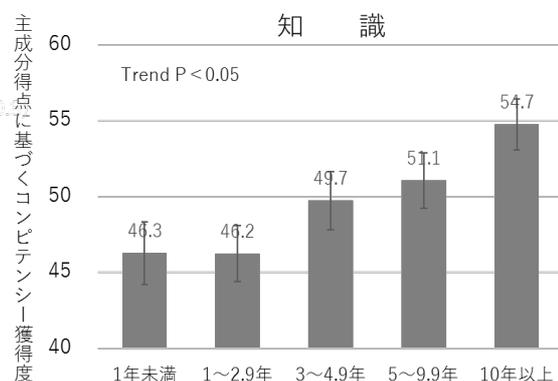
**コンピテンシー領域 「知識」**

職位別では、職位の高低とコンピテンシー獲得度との間に有意な線形関係が認められ、職員、児童発達支援管理責任者、管理者と職位が高い者ほど、高いコンピテンシーを有していた。また、経験年数の長短とコンピテンシー獲得度との間に有意な線形関係が認められ、経験年数が長い者ほど、高いコンピテンシーを有していた。



グラフは、年齢と性を調整した平均値と95%信頼区間を表す

図6. 職位と知識との関連

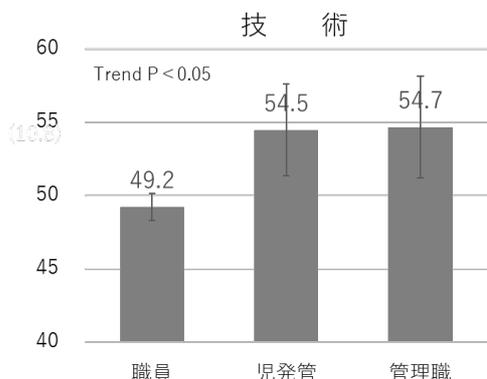


グラフは、年齢と性を調整した平均値と95%信頼区間を表す

図7. 経験年数と知識との関連

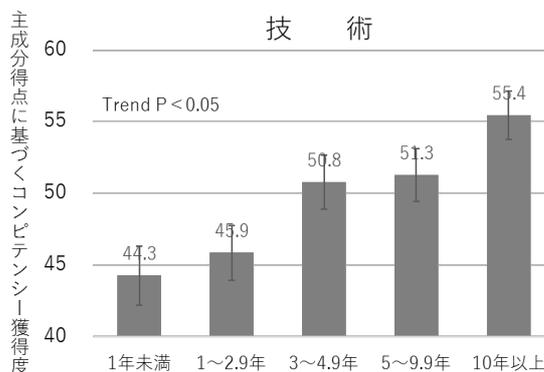
### コンピテンシー領域 「技術」

職位別では、職位の高低とコンピテンシー獲得度との間に有意な線形関係が認められ、職員、児童発達支援管理責任者、管理者と職位が高い者ほど、高いコンピテンシーを有していた。また、経験年数の長短とコンピテンシー獲得度との間に有意な線形関係が認められ、経験年数が長い者ほど、高いコンピテンシーを有していた。



グラフは、年齢と性を調整した平均値と95%信頼区間を表す

図8. 職位と技術との関連

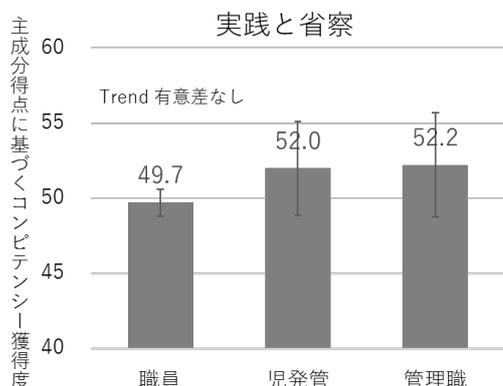


グラフは、年齢と性を調整した平均値と95%信頼区間を表す

図9. 経験年数と技術との関連

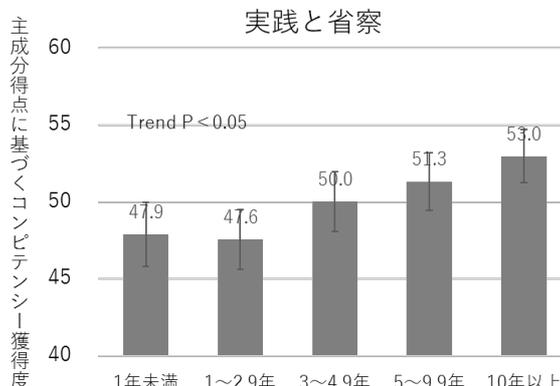
### コンピテンシー領域 「実践と省察」

職位別では、職員、児童発達支援管理責任者、管理者と職位が高い者ほど、高いコンピテンシーを有している傾向にあったが、この線形関係は有意ではなかった。一方、経験年数の長短とコンピテンシー獲得度との間には、有意な線形関係が認められ、経験年数が長い者ほど、高いコンピテンシーを有していた。



グラフは、年齢と性を調整した平均値と95%信頼区間を表す

図10. 職位と実践と省察との関連



グラフは、年齢と性を調整した平均値と95%信頼区間を表す

図11. 経験年数と実践と省察との関連

### (3) 障害児通所支援（児童発達支援）に携わる支援者のコンピテンシーモデルの提案

調査結果と考察をふまえ、幼児期の障害児通所支援に携わる支援者のコンピテンシーモデルとして、初期キャリアを形成するおおむね3年以内のモデルと、3年以上のキャリアを持つ支援者のモデルを2つ提案した。

#### 初期キャリア形成期のコンピテンシーモデル

初期キャリアをおおむね3年以内のモデルを「初期キャリア形成期のコンピテンシーモデル」(図12)とした。コンピテンシーの基盤となる能力・資質として、「関心・意欲・態度」「社会人基礎力」を置いた。その能力・資質を土台として、児童発達支援の3つの柱となる「発達支援」「家族支援」「地域支援」を行うための「知識」と「技術」が必要となる。「知識」と「技術」においては、養成校等で保有する資格を取得するために獲得した知識・技術を中心とした能力が想定されるが、児童発達支援に従事するための実践能力として十分に備わっていない場

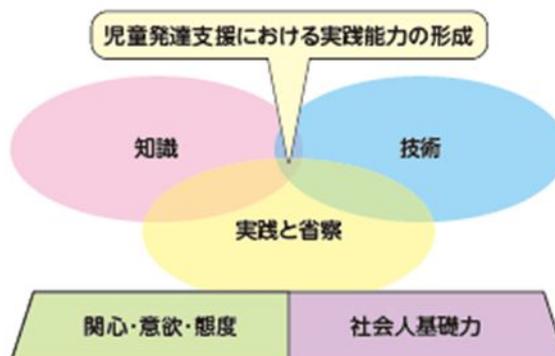


図12: 初期キャリア形成期のコンピテンシーモデル

合もあるため、児童発達支援に携わる日々の「実践と省察」の積み重ねの中で培われることを想定した。「知識」「技術」「実践と省察」の3つのコンピテンシーの重なり部分を「実践能力の形成」とした。

#### キャリア3年以上のコンピテンシーモデル

キャリア3年以上のコンピテンシーモデルを図13に示した。初期キャリアで獲得したコンピテンシーを総括した実践能力をもとに、さらにキャリアを積みながら自己を成長させていく力が必要となる。キャリアを積んでいく過程においては、支援の場に出会う障害のある子どもと家族から学ぶ姿勢を忘れず、常に「実践と省察」を通して、高次の「知識」「技術」を習得していきながらキャリアアップしていくことが必要になる。児童発達支援においては3年以上のキャリアで児童発達支援管理責任者になるための研修が受けられるため「管理・運営力」の備えていくことが求められる。

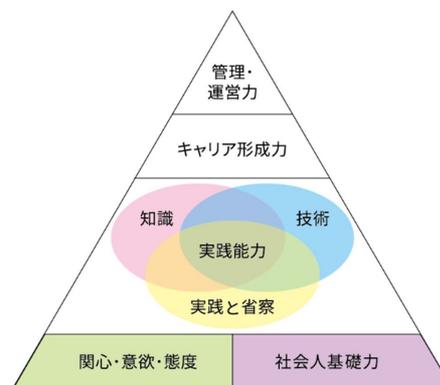


図13: キャリア3年以上のコンピテンシーモデル

#### (4) まとめと今後の研究課題

本研究では、職位や経験により「知識」「技術」のコンピテンシー獲得度が高くなることが明らかになったことに加え、「実践と省察」においても、経験年数が関連することが明らかになった。経験を積み重ねる過程で、一人ひとりの支援者が、障害児支援に携わる専門家として意識を持ち、確実に成長していく姿を想像することができる。個々の能力が発揮されること、つまり、従事する者が獲得したコンピテンシーが組織全体としての支援の質を向上させることにつながるのではないだろうか。本研究をすすめていく過程で、厚生労働省が児童発達支援ガイドラインの策定と評価システムの導入が開始された。児童発達支援における評価システムは、サービスを利用している障害児の家族からの評価と事業所の自己評価で行うことになっている。今後の課題としては、障害児支援に意欲を持った者が、職に就いた後、その職場でキャリアを積みながら専門性を向上させていくための人材育成システムの構築が必要となると考える。

そのために、支援者が保有している資格（例えば、保育士、教員免許、介護福祉士等）の専門障害のある子どもとの出会いと具体的ななかかわりを通して、支援者の立場で何ができるかを問い、単に、経験を積むだけでなく、専門性を高めるための意識を持ちながら、幼児期の障害児支援に携わる専門家として自己の成長のために主体的に努力する支援者を育てていくことが課題となる。このようなキャリア形成に導入するツールとして具体的な専門性の提示やキャリアデザインを描くことができる指標としてコンピテンシーを導入することは有効ではないだろうか。

今後の研究課題としては、本研究で作成したコンピテンシーモデルとコンピテンシーアセスメント項目を、人材育成システムの観点から再整理し、実用性をふまえたツールとして活用できるように研究を継続・発展させていきたいと考える。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4「件」)

「障害児支援に携わる支援者の専門性の探求-発達障害の早期支援に着目して」地域ケアリング 査読なし、Vo1、9、No3、2017

「児童発達支援センター等に従事する障害児支援者コンピテンシーモデルの開発」地域ケアリング、査読なし、Vo2、No7、2018

「障害児通所支援に従事する職員のキャリア形成に導入するコンピテンシーの可能性-児童発達支援における経験年数とコンピテンシー獲得度の関連から-」地域ケアリング、査読なし、Vo21、No1、2019

「幼児期の障害児通所支援に携わる支援者の専門性向上のためのコンピテンシーモデルの検討」山口県立大学社会福祉学部紀要、査読なし、第25号、2019

〔学会発表〕(計1件)

「幼児期の障害児支援に携わる支援者のコンピテンシーモデルの開発(1)」日本保育学会第70回大会、2017

〔図書〕(計0件)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。